

時枝・服部論争の再考察（Ⅱ） — 言語研究の原点的問題として —

松 中 完 二

4. 時枝・服部論争

前回は、ソシユール学説とそれを批判の踏み台にすることで展開された時枝の言語過程説について触れた。第二回目となる今回は、こうした時枝の態度とその学説に対して寄せられた批判とそれに対する時枝（と彼に賛同する人間達）によってなされた論戦、すなわち、我が国の言語学史上、最も長く続いた論戦の一つである“時枝・服部論争”における“第一次論争期”までを見ていくことにする。

その“時枝・服部論争”であるが、この論争の形態は大別すると二つの時期に分けられる。一つは*Cours*における術語とその解釈をめぐる、言語学的視点から主に時枝誠記と服部四郎の間で交された論戦の時期である。ここでは、時枝自身の*Cours*の解釈とその問題点が服部によって指摘され（1957^a、1957^b）、それを時枝が承服した形（1957:28-29）で、議論が終息に向ったとされている。

もう一つは、1967年の時枝の他界を機にした形で、1960年代中頃以降から1970年代後半の、いわゆる構造主義隆盛の時代的背景も手伝って、ハイデガーを中心とした哲学的見地から“時枝・服部論争”に対する再検討がなされた時期である。またこの時期の論争は、ソシユール自身の遺稿が発見され、その正確な解釈が施されたことも手伝って、主にソシユール研究を専門とする哲学者達が、1950年代になされた論争で、特に、時枝、服部によるソシユール学説の解釈の正否を見直す性質のことが多い。当然なが

ら、そこでは論争の当人である時枝や、あるいはその論争相手であった服部による直接の論戦は見られず、哲学者を中心とした第三者によって、*Cours*での記述をめぐる解釈の是非に論点の中心が置かれる。

よってこれら二つの時期を、言語学という共通の土俵の上での同じ性質の議論として見ることは出来ない。そこで本稿では、前者を“第一次論争期”、後者を“第二次論争期”として区別して扱う。本稿では“時枝・服部論争”の言語学的な見地での意義を再検討するものであるため、主に第一次論争期を中心に考察をすすめる。第二次論争期については、言語学的見地にも影響を及ぼすような重要な論点は細かく記すが、それ以外の哲学的、観念論的な議論については、その中心的議論の流れとそこでの論点の輪郭を簡略化して示すにとどめる。また、紙幅の関係から、今回は第一次論争期のみについて見ていく。

4・1 第一次論争期

時枝の言語過程説が、ソシュールの学説に抗するものとして打ち出されたことは、前回の論文（松中、2005）で触れた通りである。しかし、時枝学説における批判の鋒先は、単にソシュールの学説のみに向いていたのではない。時枝は、その学説を通して、当時の国語学者、橋本進吉の国語研究の姿勢がソシュールの学説を踏襲したものである点を指摘する形で、ソシュールの学説を無条件に受け入れた感のある当時の言語学界——特にその鋒先は国語学界に向けられていたが——の体質や、ひいては欧米の理論を無条件に受け入れ、それに傾倒してしまう日本人研究者の研究態度に対して警鐘を鳴らしていた部分がある¹⁾。

しかしながら、そこではこうした研究態度一般に関する是非よりも、時枝によるソシュールの学説の否定という衝撃的な事実へののみ視点が向かうこととなる。時枝が言語過程説において、*Cours*における *langue* という概念を強く否定し、言語の社会性という問題に真っ向から疑問を投げかけた

のに対し、こうした時枝の主張に対して最初に異を唱えたのが国語学者、佐藤喜代治である。佐藤は1948年、『国語学』第2号に「言語過程説についての疑問」と題する論文を発表し、時枝の主張に対して以下のように疑問を投げかける。

“著者（時枝を指す）に従えば言語はソシュールの説く如く概念と聴覚映像との連合したものではなく、この二つが並立連合して客観的に存在しているというようなものでなく、この二つを連合する作用にこそ言語がある。個人個人が話したり聞いたりする主体的な行為が具体的な言語現象だというのである。[中 略]

ここに我々は言語の姿を具体的に把握するという点に於て確かに前進しているのを見ることが出来る。しかしながらそれによって同時に又「言語」の概念が再びあいまいにされはしないかという危惧の念を抱かされるのである。というのは我々が最初の出発に当って問題としたところの国語ないし日本語というものは単に主体的な行為であり作用であるに過ぎないのであろうか。もっとそこに客体的なものが何らかの意味に於て存在しないだろうかという疑いが生ずるのである。言語はなるほど話したり聞いたり書いたり読んだりする行為に於て成り立つ。単なる音声や文字はそれ自体において内在的に何らの意味をも持ち得ないことは明らかである。又聴覚映像とか概念とかはそれだけでは決して具体的言語ということが出来ない。音声や文字や、聴覚映像や概念や、それらは言語主体によって結合せられることによって始めて言語という事象が成り立つのであって、外に言語というべきものが具体的に存在するのではない。しかしながらかかる現象を考えてみるに、その行為は単に個人的主体的なものではない。もとより個々の主体的な行為に於て言語は具体化されてはいるが、それは決して個々独立した行為ではない。個々の行為の成立する背後には之を成立せしめる社会的客観的なものがある。音声と意味とは個人的恣意によって結びつけられることは許されぬ。音声は音声自身何らの意味をも本有しているものではない。ある音声がある意味をもつということは厳察に言えば比喩的な表現であるかもしれぬ。けれども音声を発し又はそれをきく時はある一定の意味を思い浮かべるように結びつきが出来ている。音声と意味を結びつける行為はあくまでも主体的なものであるが、その場合何を結びつけるか、いかに結びつけるか、その結びつける作用には一定の「型」がある。その型は決して個人的なものではない。[中 略] 主体というのは単に個人的という意味ではないようであるけれども、日本語における主体一般というような場合、は単に主体という語によって表すことはもはや適切では

ないと考えられる。[中 略]

言語がその個人的主観的性質の故に絶えず分化の傾向を帯びるにも拘らず、一方では言語は言語としての用をなす点から常に類同に向うべく要求せられる。言語は社会的なものとして共通性を必要とし、その意味では客観性をもつ。[中 略]

何れにしても言語が共通性をもつということは決して自然の結果ではなく、そこに必然性が潜んでいると考えざるを得ない。この点から観察する時には言語は雑多な様相の中に一定の構造をもち一定の法則の支配を受けていると考えられる。[中 略]

ソシュールが言語を社会的事実と認める、その認め方が正しいか否かは暫く措くとして、之を社会的事実として取り上げたことは注目すべきものと考えられるが、この点に関して著者（時枝を指す）が

従って社会的ということは、「言語」の本質をいったことではなく、「言語」の性質についていうべきことである。それは、「言語」に冠せられるべき幾多の修飾語の一であると思う。（第一編総論六 フェルディナン・ド・ソシュールの言語理論に対する批判）

といっているのは、ソシュールのいわゆる言語に対する批判であるが、それは同時に本来言語のもつ社会的性質を展開せしめる機会をも失わしめたことは遺憾に思われる。[中 略] 少なくとも話手と聴手との間に於ける共通性無くして言語現象は考えられぬ。（1948:19-30）”

ここで述べられた時枝学説に対する佐藤の疑問点を要約すれば、次の三点である。

1. 言語の主体性という問題についての見解。
2. 言語の客体性という問題についての見解。
3. 言語の社会性という問題についての見解（特に“ラング”に関する問題として）。

これに対して時枝は1950年、『国語学』第4号に「佐藤喜代治氏の「言語過程説」についての疑問に答えて」という論文を發表し、佐藤の疑問に対する回答とする。しかしここでの時枝の言葉は、次のように抽象論に終始した曖昧な部分を残したまま、佐藤の疑問について直接の回答を与えてはいない。

“理論がただ理論のために存在するものでないということは、理論と実証的研究とが、ややもすれば遊離しようとする国語学の現状において極めて大切なことであるといい得るのである。そこで私は、言語過程説に対して別個の見解を寄せられる方々に対して、次のような反問を提出することを常としている。「あなたの見解は、国語現象をどのように説明しますか。」「あなたの見解は、国語学の体系にどのようにひびいて来ますか。」「あなたの見解に従って、どのような問題と領域とが、国語学に開拓されますか。」と。[中 略]

以上の反問は、佐藤氏の寄せられた質議と批判とに対しても、同様に加えることが出来るのではないかと思う。氏が言語の本質はかく考えるべきであるという見解より更に進んで、「はなし」と「ことば」の別に従って、国語学の対象はどのように設定せらるべきであり、具体的な研究方法はそれによって如何に規定されて来るか。国語の諸現象に対する説明が、如何に異なって来るか。また国語学の領域が如何に拡大され、また異なって来るか。如何に異なった問題が提出されるか等々の見解が示されて、始めて氏の言語本質観に対して、私が適切な批判を下し得る段階に到達することが出来るので、「国語学」第二号に寄せられた氏の論旨の範囲では、私としては、可も不可も言い得るところにまで到達していないと思えるのである。(1950a:71-72)”

ただし、そうした中で、唯一、佐藤の疑問に答えた部分が、言語の客体性の問題についてである。この問題に対して時枝は、あくまで術語の意味解釈の違いという点から、次のように答える。

“国語学原論において客体或は客体的というのは、主体に対する表現内容或は表現素材をいうのであって、一般にいうところの表現形式に対応する意味をいうのである。氏は（佐藤を指す）、客体的ということをおそらくここでは、言語主体を制約するところの外部的なものというような意味に用いられたのではないかと推測するのである。[中 略]

いづれにしても、氏は客体というものを、言語行為を制約する何等か外部的なものというに考えて居られるもののようである。言語過程説は、このような外部的拘束力を、むしろ言語主体の意識の問題として説明しようとするのに反して、氏は、これを主体と切離して、客体の名称を与え、それを以て個々の言語行為に対立するものとしての日本語或は国語の实在を説こうとするのである。[中 略]

言語過程説において主体的という時、常に必しもそれが恣意的であるこ

とを意味しない。[中 略]

言語過程説に於ける言語が主体的であるということの根本の意味は、それが恣意的であるか、制約的であるかということの以前に、言語は常にそれを行為する主体を考えないでは、その成立を考えることが出来ないことを意味する。従って具体的にはより恣意的な場合もあり得るし、より制約的な場合もあり得る訳である。[中 略] 主体的ということ、個人的、恣意的の意味に解されたのは、原論の叙述の不完全によるものであるか、佐藤氏の誤解に基づくものである。このように主体的ということは言語を個性的な面に於いて捉えたことでもなく、また普遍的な面で捉えたことでもなく、更に根源的な言語の構造をいったもののなのである。(1950a:72-74)”

この紙面上での論の応酬が、その後約二十年近くにわたって続く、ソシユール学説擁護派と時枝学説擁護派による長い論争の幕開けとなる第一歩であった。

同年、時枝学説を養護するものとして、三浦つとむが時枝学説を“言語理論として世界の最高水準を行くもの”、“前人未踏のきわめて見事な弁証法の展開 (1950:237-238)”と賞賛し、『文学』第19巻第2号に「なぜ表現論が確立しないか」と題する小論を発表する。三浦はそこで再び、次のように時枝学説に賛意を示す。

“時枝氏は、言語における「主体の客体化」を、自画像を描く場合と本質的に一致するものと見た。[中 略]「主体の客体化」という言葉だけをながめると、観念論のように見えるからわからずやの非難をうけやすいし、またここで誤ると観念論に転落することにもなるのだが、何をのべてあるかを理解してそれを正しく仕上げる必要があるので、表現の主体を客体化された主体と区別したこと、言語理論にこのような主体の概念を導入し「展開の重要な基礎」としたことは、時枝言語学の功績のある。(1950:75)”

三浦がここまで時枝学説に賛意を示すのには、単に時枝学説の学問的是非²⁾のみに止まらず、時枝の学説の性質に、国語学界、ひいてはその背景にある言語学界全体の研究の在り方を非難する部分がある点で、それが三浦の抱く言語研究の姿勢に対する理想と少なからず合致する部分があった

ためであると思われる。そうした三浦個人の言語研究に対する理想は、三浦の後年の著書（1951、1976、1981、1983^b、1983^c、1983^d）等でも随所に見ることが出来る。また三浦はこれより遡ること二年前、1948年には「弁証法は言語の謎をとく——言語学批判序説——」と題する論文を『思想の科学』第3巻第5号に発表している。そこで三浦は次のように、ソシユール学説に対する批判と同時に、日本の言語研究の姿勢に対する批判をも展開している。

“ソシユール言語学の功績だといわれている「言」と「言語」の区別にしても、実は表現形式と表現内容との区別を歪めてとりあげたものであり、表現形式と表現内容との一般的な関係をしらべてその特殊性において論ずべき筋合のものである。ソシユールはどのようにしてこれをやれなかったかという、彼が信奉していた認識論がカント主義であったためである。言語が直接に表現するのは概念であるが、カント主義はこの概念を現実の世界の反映としてではなしに、アプリオリにひきだしてくるのである。[中 略]

ソシユール言語学が、新カント派になって「価値」という概念をとりいれたのは、これによって概念の差別を説明しようとしたためである。経済学に於ける限界効用学説が、価値を主観から、すなわち観念からひきだしている以上、小林英夫氏のいうように。これとソシユール言語学とが共通点をもっているのはあたりまえである。逆立ち同志が出会えば、互いに相手を正当に立っているものと考えるであろう。

わたしは、こういう言語学や芸術学を相手にするのをやめて、自分で現実から理論をひきだしてくることにした。[中 略]

言語学者や芸術学者の言語論をみていると、メクラが大ぜいですばらしく大きな象をなでている古い物語を思い出さざるをえない。メクラの先頭に立つものは、露骨な神がかり論者である。[中 略] ソシユール学派は、カント主義に立って自然的所与を否定するのであるから、生きた肉体ももたずまたかたちの上でも足のない、オバケのようなものである。同じカント主義者で、やはり言語をアプリオリからひき出したフンボルトは、このような複雑なものが外的関係から発生し進化するとはかんがえられぬという理由で人間の本性のなかに言語の起源を認めた。[中 略]

ソシユールが観念論的にきりはなした、概念をうみだす過程すなわち現実との結びつき（この現実が客観的な自然や社会や他人の精神であろうと、または客観的な存在としての自分自身の精神であろうと、それは問わない）をとりいれ、言語としての表現をもって第一の段階を終了したものとし、

対象—認識—表現というコースを言語の基礎的な成立過程としなければならない。[中 略]

観念論的にこの中間項をきりとり、認識—表現—認識というコースを基本的なものとしてはならない。言語の理論的な部分は、まずその対象そのものからはじめて、基礎的な成立過程全体の論理的立体構造をしらべることにある。いままでの言語学者のように、言語とそれを表現するときの場との関係においてとりあげる現象的なやりかたを清算するの でなければ、言語はいつまでたっても謎的存在であろう。(1948:20-27)”

こうした三浦の言葉からも判断され得るように、ソシユール学説を全面的に受け入れた日本の言語学界に対して反意を露にする三浦にとって、ソシユール学説を批判し、それによって国語学界、ひいては言語学界全体に対して疑問を投げかける形となった時枝学説を擁護する立場に立つことは、ある種必然的結果であったと言えよう。

一方、時枝学説に対する更なる疑問として、その後1951年に風間力三が『国語国文』第20巻第6号に「言語研究の対象——言語過程説についての一つの疑問——」と題する論文を発表し、時枝学説の不備を次のように指摘する。

“言語過程説にあつては、言語は精神物理的パロル循環以外の何ものでもないと考えられ、従つて具体的に実在するものはこの精神物理的パロル循環のみであるとせられて、主体の脳裡における観念としてのラングは認められないのであるが、観察的立場においてのみみられる言語の相を観察するという言語研究の一の部分としては右は、全く正しいと考えられるとしても、そこに、主体的立場において意識せられ、主体にとって最も具体的に自己の言語活動を与えるところの言語の相を逸することになるのではないかと考えられて来るのである。言語過程説においては、言語活動は主体的な活動以外の何ものでもないとされ、言語は常に主体的立場における行為としてみられるのであるが、言語がしかく主体的な行為にほかならぬが故にこそ、主体的意識における言語の相が忘れられてはならぬと思うのである。(1951:62)”

そして同年、大久保忠利が『文学』第19巻第6号に、「時枝誠記氏のソ

シニール批判を再検討する——時枝氏「言語過程観」批判の序説として——という挑戦的な論題の論文を発表し、ソシニール学説におけるラングという概念の正当性を中心に、三浦の時枝学説擁護に対する反論も含めた形で、時枝の言語過程説に対する辛辣な批判を展開する。そこで大久保は、時枝の『国語学原論』、『国語研究法』、『日本文法・口語篇』、『国語学史』、『中等国文法別記』の五冊の著書（大久保の論の中では、それぞれ順にA、B、C、D、Eで表される）に見られる時枝学説の記述と小林訳の『言語学原論』、『改訳新版 言語学原論』（同じくそれぞれ順に旧S、改Sで表される）の二冊を基にして、ソシニール学説がデュルケムに範を取るフランス言語社会学派の影響によるものであり、それがソシニール学説の不備を招いていると指摘する時枝学説への批判を展開する。

“今日の他の諸科学の発展、また別な世界観から見る時、ソシニールの考え方にはすでにそのままでは通用しない箇所のあることは、当然ですが、時枝氏の批判は、その点に触れつつも、それを発展し得ないこと、又、時枝氏の抱負にも拘らず、氏自身にも隣接科学への理解が不十分な点があるのではなかろうか？ [中 略] デュルケムの考えを批判する時枝氏は、一体、いかなる哲学的立場に立っておられるのか、この点、「哲学が無い」では済まされません。

例えば、氏は、「私のいわゆる主体的言語学を、個人心理学的であるというのは当たらない——中略——『原論』はなお極めて序論的にしか扱っていない（B—〇〇）と、断わっておりますが、言語はまず社会との関連においてとらえるべきで、あれだけの年数と頁数を費やした主著に「社会性」が極めて序論的にしか取扱われていない事実こそ、言語の本質を問う論述としては、ソシニールよりも後退し、社会性の欠如を何よりも現わしております。[中 略]

ソシニールのラングについては、[中 略] 次のように明らかにこれを「否定」します。

- 1 「循環過程に存する概念と聴覚映像との連合したものが成立し存在する如く考えたのは甚しい誤解」(A 二七一。点原著者、点引用者—以下同じ)

「言語が理解の媒材となり得るのは(中略)決して概念と聴覚映像との連合したものが脳中に貯蔵されてあるが為ではない」(A 二八)

時枝氏が、ラングの脳中の存在を、右のようにハッキリと否定している点を特に注意して下さい。

2「言語構成観に従えば、ラングは、聴覚映像と概念との結合であり、個人を外にした社会的存在であるが故に、ラングをかく観する限り、言語による事物の理解ということは、言語研究の本質的領域には属さない。云々」(A 一二〇)

ラングを「個人を外にした社会的存在」とソシュールが考えた、として時枝氏は非難します。これはソシュールがラングを「社会的事実」と見ていることを指しています。(改S 一〇四) ソシュールまた「社会的事実」とも呼んでいます。(改S 二七)

この「社会的事実」*fait social*という概念は、ドロシェフスキーも指摘する通り、デュルケームの概念を類似的に借用している、と見ることはできましょう。しかし、果たしてソシュールは、時枝氏が理解したように、ラングを外在するもの(時枝氏はむしろ「物」と見たと理解しておられるようです)が存在する、などと言っておりましたか? 言葉にとらわれては真意に迫り得ません。ここに、私は、時枝氏のソシュール「誤解」の中心点を見ます。[中 略]

時枝氏は、一体「概念 *concept*」なる用語の内容を、どう理解しているのでしょうか? 時枝氏は、ソシュールの指している心理学的な「概念」、「意識事実」としての概念の意義が全くわかっておりません。哲学的にも勿論です。時枝氏は、事物も概念も表象も同列に置き、「言語を主体の表現行為であるとする立場に於いては、事物にしろ、表象にしろ、それらが凡て、主体によって、就いて語られる素材であって、言語を構成する内部的な要素と見ることは出来ない」(A 五一)などと断言します。

[中 略] 何より時枝氏の「概念」無理解の良い例は、氏の言語観の重要な分類である「詞と辞」の区別を、「概念過程の段階」を経るか経ないかに置く所(A 九〇・二三一・二三五その他)そして、「おや」「ねえ」等は、概念過程を経ない(!)と言うのです。(A 二三五) この最も著しいのはいわゆるコピュラ、「だ」「です」が、「辞」、即ち「概念過程の段階を経ない」、と規定されていること、これが時枝氏の「概念」の理解です。[中 略]

さて、時枝氏は、前述の「媒体」にとらわれつつ、特に念入りにソシュールのラングをA 七四―七九にわたって否定します。ところが、その叙述をよく見ますと、時枝氏はソシュールの主張をそのまま繰返して「自分の主張」とし、逆にソシュールが言っていることを、「言っていない」ように主張しています。これは「媒体」「実存」「外在性」などの訳語から、ソシュールの主張を「何か実体的なものが飛込む様に考えられ易い」(A 七

七) とし、(実は、「ソシユールがそう言っている」と考えてしまって否定しているのが時枝氏です) とし、つづけて、「ところが、言語活動に於いて思想の伝達をなす所のものは、かかる実体的なものではなくて、実は甲と乙との間に働く物理的生理的心理的な想起的過程である」などと、全くソシユールがパロールについて言っている(改S 二二) 通りのことを、ソシユールに教えるかの如くに繰り返しているところによく現われています。これが、時枝氏の「ソシユール批判」なのです。[中 略]

時枝氏を誤解せしめた「訳語」に、ラングの「實在」と「外在性」があります。ソシユールの言うラングの實在とは、物体のように手に触れるもの、というのでは決してなく、「その座を脳中に有する實在」(改S 二六)「その所在は 聴覚映像が概念と連合する場所」(改S 二五) と、脳髓に推定的に實在すると言っていると考えるべきで、ライヘンバッハのいわゆる *illata* に当たると思われます。「外在性」も、ソシユールは時枝氏の理解するように、「我と他者の主体的行為を離れて存在する実体的なものと考え」(A 二七) てなどはいないのであって、「ラングは言語活動の社会的部分であり、個人の外にある部分である。個人は独力ではそれを作り出すことも変更することもできない。言語は共同社会の成員の間に取りかわされた一種の契約の力によって初めて存在する」(改S 二五) と、(ここは比喩的にアイマイな表現ですが)、要するに共通の言語の通用する社会に生存し成長する各個人が幾万回となくくりかえされるパロールの循行と、物質的諸存在にはほぼ同様に反応する過程において形づくられるラングの「一般的共通性」(「平均」もアイマイです) を指しているのものであって、「契約の力」などと言ってあるからわかりにくくなったわけなのです。

「観念と語詞映像とを連合せしめるには、前以てその連合をパロール行為の中で経験しておかずして、どうして可能であろうか」(改S 三一) ラングの脳髓の機能としての存在を前述の通り明確に否定する (A 二七・二八) 時枝氏は、これに何と答えられますか？

[中 略] 以上、ソシユールがとらえた「ラング」を、時枝氏はその「訳語」につかまって、誤解し、その誤解に立って不当に否定してしまった、というのが私の「時枝氏の『ラングの否定』」に対する批判です。時枝氏の否定にもかかわらず、ラングは健在である、と言うべきであり、時枝氏のソシユール批判は、見当が外れていた、とハッキリ申し上げます。(1951:80-86)”

そして自らの批判に対する時枝からの回答を、大久保は次のように、一種挑戦的とも思えるような文面で求め、自らの批判を締めくくる。

“この批判に対する回答は—もしなされる場合は—「見解の相違である」とか、「原著をよく読め」という抽象的なものでなく、私のお尋ねしている諸点について、

- 1 これこれの点については、何書の何頁にこう述べておいた。
- 2 この所は、自分の解釈と批評は誤っていた。批判者に同意し、自説を次のように修正する

等、具体的に御教示願いたいと思います。(1951:87)”

大久保のこうした批判に対して時枝は、同じく1951年、『文学』第19巻第9号に「言語の社会性について——大久保忠利氏の「言語過程観批判の序説」に対する答をも含めて——」を發表し、1. 言語研究と言語本質観の問題、2. フランス言語社会学派における言語の社会性、3. 言語過程説における言語の社会性の三点について、次のように回答を寄せている。まず1. については、

“学問の体系を構築する手続きから言えば、言語の本質観を思弁的に構築して、然る後に、これを種々な言語現象に演繹的に適用するというのではなく、先づ、種々な言語現象に直面し、これに沈潜し、これを観察するところから、言語の本質についての考えを求めて来なければならないことである。ひるがえって、これを他の言語現象に適用して、矛盾なく理論的に説明することが出来た時、この言語本質観は、定説として確立されるのである。私の言うところの言語過程観は、このようにして今日の私の言語研究の基礎理論となったのである。[中 略]

大久保氏を含めて、言語過程説を哲学的議論に持ってゆくことではなくして、事実の提供によってこの学説の欠陥を指摘されたいということである。これらの事実がソシユール学説によっては完全に説明出来るが、言語過程説によっては説明出来ないという風に。事実の提供こそ、私に対する最も厳粛な批判である。大久保氏の批判全体を通じて、言語過程説の射程の外にある事実を挙げて、その解決を迫るということが殆ど見られないのは甚だ遺憾であった。(1951:76-77)”

とし、次いで2. については、

“ソシユールはその研究の出発点において、「言循行」(le ciecuit de la parole) の名において、個人間の会話を観察の対象としたことは正しいことであつた。我々の言語研究の具体的な対象は、実はこの「言循行」以外には存在し得ない筈なのであるが、ソシユールは、この循行過程を以て、精神、生理、物理的要素の混在したものとみて、このような混質的なものは、科学の対象とすることが出来ないものであると考へた。そこで、この混質的なものの中に、等質的にして、本質的なものとして、概念と聴覚映像との結合から成る心的実存体としての「ラング」を設定するのである。「ラング」は、ソシユールに従えば、全く心理的なものであるが、具体的な「言循行」の説明原理として求められた「ラング」と、言語活動との関係は、物質をその究極の分析単位において説明しようとする自然科学的方法論の類推であると私は見たのである。[中 略]

ソシユールは、このような「ラング」を、社会的結晶 (cristalisation sociale. 改訳本二九頁) とともに、社会的所産 (produit social 同上) とも言っている。「言語は個人にあっては完璧たることはなく、大衆にあって始めて完全に存在する」(同上書二四頁) と言っているのもそれである。以上の所説で明らかなように、「ラング」は各人が受動的に蓄積するものであることにおいて、社会的所産の名に値するのである。

言語は話手の機能ではない。個人が受動的に登録する所産である(改訳本二四頁)。

個人は独力ではそれを作り出すことも変更することもできない(同上書二五頁)。

その二は、「言」が各人に理解されるためには「ラング」が必要とされるところから、思想交換の媒介という意味において、社会的といわれる。

言が人に理解され全き効果を収めるには、^{ラング}言語が必要である(同上書三一頁)。

しかしながら、右の「ラング」の「言」における関係は、ソシユールにおいては、特に「ラング」の社会性としては強調されなかつたようであつた、専ら第一の意味において、言語が社会的であることが認められたのである。これを総括するならば、「ラング」は個人を超越する外在性と、個人を拘束する拘束性においてその社会性が認められたのである。このようにして「ラング」は、デュルケーム的意味における社会的事実の概念に合致し、言語学は社会学の一翼を荷うものとして認められたのである。[中 略]

言語において、社会及び文化の反映を観察しようというこれらの学派の立場に対して、その反映を荷う「ラング」の概念の設定は、極めて有効であつたことも理解されると思うのであるが、我々が言語において社会性ということを考える時、ただ社会の共通所産としての「ラング」を考え、その社会的反映を観察することだけで満足することが出来るであろうか。我が国におけるソシユール言語学の継承者たちは、ソシユールが言語は社会

的所産であると言ったことだけから、この言語学が言語の社会性を余すところなく究明しているでありおうというような錯覚に陥ってはいはしないだろうか。そのような錯覚から、言語主体を強調する言語過程説が個人心理学的であり、言語の社会性を無視した言語理論で、ソシール言語学よりも後退したものであるという大久保氏の批判のようなものも出て来るわけである（序説八〇頁）。（1951:77-79）”

と回答する。またソシール学説におけるデュルケーム社会学の影響については、時枝は次のような回答を寄せている。

“言語の社会性を明かにするには、ソシール学的観点より外にないという迷信を打破するには、ソシールの言語理論の発生し、育成された地盤であるデュルケーム社会学の理論体系と、それに対立する諸々の社会学的見地とを観察することが近道であるように思えるのであるが、私には未だ自身を以てこれを明かにするだけの力が無い。ただ僅かに社会学史の教えるところに従うならば、デュルケームは社会有機体説の見地から、社会はそれ自体としての特有の生活を行い、内部の要素的諸個人に対し拘束力を現わすと説いているのに対して（松本潤一郎、社会学原論一三〇頁）、タルドの如きは、社会事象を諸個人の心と心との関係現象であると解し（同上書、一一八頁）、ジメルが社会学を以て人間相互作用それ自体を対象化することであるとし（同上書、一五八頁）、和辻哲郎博士もまた、「社会は『人間』である。社会の学は人間の学でなくてはならない。従ってそこでの根本問題は人と人との間柄である。」（人間の学としての倫理学二二七頁）と述べられる時、我々はそこに、デュルケーム的社会概念とは凡そ対照的な社会概念を見出すのである。（1951:78-79）”

そして3.については、

“人間は、社会的行為をなすことによって、その生活を営み、その生命を維持して行くことが出来るのであるが、言語は正にそのような対人関係を構成するに必要な手段であるという意味において、これを社会的と言うことが出来、また、言語がそのような対人関係を構成することが出来る機能の上から、これを社会的ということが出来るのである。人間行為は、これを全般的に見れば、常にそれが社会的であるとは言えることが出来ない。例えば、山に入って木の実を拾い、飢えをしのぐというような行為は、そこに何等対人関係を構成もしなければ、想像もされていない。しかしながら、

言語行為は、いつ如何なる場合にでも、対人関係が想像されないで行為されることは無い。即ちそれは常に誰かに向って表現される行為であって、言語が本質的に社会的であると言われる所以である。

[中 略] 以上のように、言語の社会性の意味を規定することは、言語を人間行為の一形式とみる言語過程の理論の当然の帰結であるが、それはまた、同時に、我々の日常の言語生活の反省、観察から導き出されて来る結論でもあるのである。フランス言語社会学においては、社会組織の反映として、個人がただ受動的に登録する「ラング」を社会的所産としてみるのであるが、ここでは、時々刻々に我々の対人関係を左右する主体的な言語表現において言語の社会性をみようとするのである。前者は静的な社会的反映の観察であるのに対して、後者は動的な社会的機能の観察を意味するのである。

[中 略] 言語行為は、その成立のそもそもの始めから、人間の社会的生活の重要な手段として、その発生を等しくしていたものであろう。従って言語において社会性を言う時、言語と国家、或は市町村、或は家族というような、いわゆる社会学で好んで問題にするような近代的な社会集団との交渉関連のみを問題にすることは正しくない。言語における社会性は、もっと基本的な人間関係においてこれを見る必要がある。(1951:79-81)”

また同年には、『言語研究』に服部四郎の「メンタリズムかメカニズムか？」が発表される。服部はここで、科学的素材としての言語研究の在り方について、ブルームフィールド以降のアメリカ言語学を基にして持論を展開する。ただしここでは、直接時枝学説に対しての意見や批判といった形ではなく、あくまで中立的立場から科学的言語研究の在り方について、以下のような私見を述べる程度にとどまっている。

“私は、自然科学者たとえば物理学者が物理現象を研究するのと同じように、我々が人類の行動を研究することはできないと思う。たとえば物理学においては、観察の対象は我々の外にあるから、我々の直接経験の“主観的”部分、即ち我々の内部における現象と関係があり他人が観察できない部分は、出来るだけ除外しなければならない。例えば物理学者は視覚錯覚に由来する誤差を排除するために何らかの方法を講じなければならない。しかしながら、社会学においては観察の対象は人類の行動である。観察者自身が人類の一員であって、彼自身の行動を観察することができる。そして、その場合には、その直接経験の“主観的”部分を完全に排除すること

は観察者にとって有利ではないと私は思う。[中 略] しかしながら、上のように述べたからとて、必ずしも、社会学者は主観的にのみ研究し得るとか、言語学者は元の主観的メンタリズムに戻らなければならないとか、言うことにはならない。それどころか、彼らは科学者として、勿論でき得る限り客観的でなければならないし、独断的な主観的陳述を排除するように努力しなければならない。[中 略]

私が特に強調したいと思うのは、機械的メカニストでも、それを容認しないで置きながら、実は話し手達のいわゆる意識を利用しているのだという点、さらに、言語学者が話し手達のこの意識を利用するのは正当であるという点である。[中 略] 即ち、社会科学において、“科学的であること”は、物理学、化学などで“科学的である”とは多少異なることを意味しなければならないと思う。(1951:1-4)”

一方、大久保忠利は更に翌年、『国語の力』第4巻に「言語の本質を求めて ソシユール学説の発展の上に」という論文を発表し、時枝が否定したラングという概念についての正しい見解をすすめながら、前年に『文学』第19巻で展開した自らのラング解釈を捕足する形で、次のように論をすすめる³⁾。

“ソシユールは、せつかく *illata* としてのラングをとらえたのだが（仮称「個人ラング」）これと「社会的事実」としてのラング（仮称「社会ラング」）との関係を、ただ「もしすべての個人の脳裡に蓄積された語詞映像の総和を、とっくりと取込むことができたならば我々はラング（社会ラング）を組立てる社会的紐帯（*le lien social*）に触れるであろう」（改訳二四頁）とか、「個人ラング」と「社会ラング」を同じラングの名称で呼んでいるために区別せず、「ラングは、人が他人を理解し、他人に自己を理解せしめることを許すところの言語習慣の総体（*l'ensemble des habitues linguistiques*）である」（同一〇四頁）などと言っている。[中 略]

ソシユールが「個人の脳裡に蓄積された語詞映像と言うのは個人ラングを指している。この時、単に「語」が辞書の中にあるように考えてはいない。[中 略] ソシユールも、単位を求めてもてあましている。だから、前述のように「語」をラングの単位の近似的観念を与えるものとして、あとはそれに立って論を進めているのだ。（ここに個人ラングと、社会ラングの混乱がある。）ここは、「文法的諸特質を与えた語」を個人ラングの単位として定立し、それと社会ラングとの関係を明らかにしつつ、社会ラン

グの単位を求むべきであった。(1952a:2-4)”

同じく1952年には、黒岩駒男が「言語の過程性と記号契約性」を『久留米大学論集』第4巻に発表し、言語記号の契約性という問題点から時枝の言語過程説に対して、次のように反論する。

“確かに言語行為の遂行が時間的線条的継起的過程として理解し得るものを含むこと、即ち言わば言語現象が過程性によって貫かれていることは認めなければならない。[中 略] 然し過程説の一元論的強味は同時にそのまま問題点ともなるのである。先ず第一に問われなければならないのは、かかる過程が如何にして可能となるかと言うことである。[中 略] かかる記号的規定を全く受けない過程の遂行のみを考えるとすれば、この世の中には叫びや無意味な発声の氾濫があるのみであろう。否、かくの如き純粹に衝動的な表現も、表出過程を見れば必然的過程ないしは必然的連合として記号性の支持を必要としないし、去ればこそ時枝博士も「多くの感嘆詞は自然の叫声に類するもので、未だこれを言語の体系中に加えることが出来ない…」と言われたのであるが、一方、聴手の受容過程を見れば、それは必然的過程ではあり得ず、記号性の介入を待って初めて理解過程が遂行されるのであり、それ故に、かかる叫び声の如きものも言語の体系から除いてしまう事が出来ないのである。逆に言えば、以上の事実は又、言語性の成立が記号的契約によって支えられていることを証明するとも言える。言語・非言語の境目は過程の軸のみでは決定も説明も出来ない筈である。(1952:18-19)”

その後、1956年に時枝は『国語学原論 続篇』を出版する。この本は表向きこそ『国語学原論』に継ぐ時枝学説の補足的展開となっているが、その構成は、それまで時枝の学説に対して寄せられた疑問や批判に答えるものであった。同書の中で、時枝は自身の学説である言語過程説の基本的原理を次のように説いている。

“言語過程説は、言語において、人間を取り戻そうとするのである。言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するということである。[中 略]

言語過程説は、言語を、音韻と概念（或は思想）との結語体と考える言語構成説に対し、言語を、精神、生理、物理的過程現象であるとする言語理論であって、その概要は、前項に述べた通りであるが、その基本的な考え方は、凡そ次のように要約し、かつ布衍することが出来る。

（一）言語は、人間の表現行為そのものであり、また、理解行為そのものである。その考え方は、表現理解の行為とは別に、或はそれ以前に、表現理解において使用される資材としての言語（ソシユールのいわゆる「ラング」）が存在するという考え方を否定するものである。あるものは、ただ、素材を、音声或は文字を媒材として、可感覺的に外部に表現し、或は、音声、文字によって、ある思想を理解する作用だけであるとするのである。[中 略]

（二）言語が、表現理解の行為であるということは、言語は、常に表現主体或は理解主体、一般的に言って、言語主体（言語を成立させる人間）を、不可欠の条件として成立するものであることを意味する（「正篇」第一篇総論第五項）。[中 略] ソシユールは、資材的言語ラングの成立に關与する話手、聞手の作用を重視した。しかし、このようにして成立した資材的言語は、もはや個々の話手聞手の作用とは、独立した存在であると考えた。

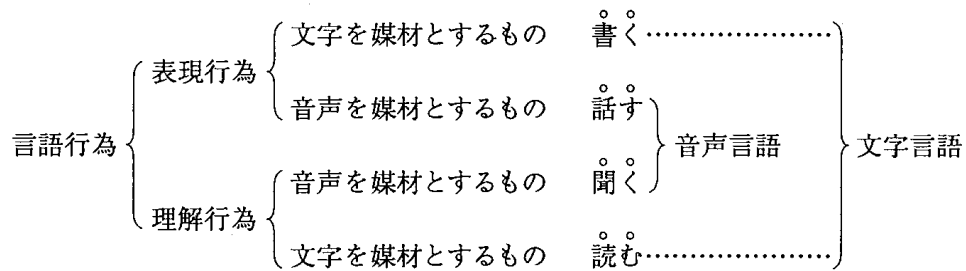
言語過程説の最も著しい特色は、一切の言語的事実を、言語主体の意識、活動、技術に還元して説明しようとするところにある。

（三）言語を、言語主体の行為であるということは、言語は、常に必ず個人の行為としてのみ成立することを意味する。この考え方から、言語過程説を個人心理学的言語理論であるとするのは、当を得たことではない。[中 略] それは、常に話手に対立する聞手に制約され、聞手の理解、不理解を顧慮し、聞手に働きかける個人として規定されている（「正篇」第一篇総論第五項「場面」）。ここから、言語の社会的機能と、同一社会圏における言語習慣の平均化を説く鍵が見出せることになる。ソシユール言語学のように、同一社会における平均化されたラングの存在を前提として出発することは、言語研究の最も重要な問題を回避したことになるのである。どのようにして、平均化されたラングの如きものが、形成されるかというところにこそ、むしろ、言語研究の重要な課題があるとみなしなければならないのである。

（四）言語の行為主体が個人であるということは、言語学の対象は、特定個人の特定言語行為以外にはあり得ないことを意味する。ソシユールは、個々の言語行為とは別に、個人を超越して存在する資材的言語ラングを真正な言語学の対象と考えるのであるが、言語過程説は、明らかにこの考えを否定する。[中 略]

（五）言語を、表現及び理解の行為であるとする時、それは、根本的に、音楽、絵書、舞踊などの表現活動と共通した性質を持っていることが分かる。これらのものと、言語との相違する一つの著しい点は、表現の媒材を異にしていることである。[中 略]

(六) 言語は、その媒材の性質の相違によって、音声言語か、文字言語かのいずれかにおいて成立するものである。更に、これに、表現行為、理解行為の別を加味するならば、具体的な言語は、次の図に示すように、「書く」「話す」「聞く」「読む」のいずれかにおいて成立するものであって、そのいずれにも所属しない言語というものは考えられない。



[中 略] これらの言語の形態上の性質と機能とを明らかにすることは、言語研究上の重要な課題であるべきであったにも拘らず、そのことが全く問題にならなかったのは、言語学の対象を、表現理解以前の資材的言語ラングに求めたからに他ならないのである。それも、言語学が、言語の系統関係や歴史的系譜を辿ることを、主要な課題としていた間は、さまで破綻を見せなかったが、人間生活における具体的な言語的事実の解明を課題とするに至って、ようやくその無力を暴露するに至ったのである。[中 略]

(七) 言語を、表現理解の行為であるとする時、言語は、人間の行為一般の中に位置づけられなければならない。[中 略] 言語は、行為であり、活動であり、生活である。それは、次の等式によって示されている。

$$\text{言語} = \text{言語行為} = \text{言語活動} = \text{言語生活}$$

[中 略] 言語は、何よりも人間生活全体の中で切取られる必要があるのである。(1956:6-14)”

しかし当時は『国語学原論』で展開した時枝学説に対する非難が強かったせい、『続篇』もあまり好意的には取り上げられなかったというのが、どうやら実情のようである。例えば『国語学』第25号での阪倉篤義による同書の新刊紹介では、阪倉自身、次のような否定的な見解を述べている。

“本書において特に強調されるのは、「言語の成立は、表現が理解される過程にあるのであるから、文学の芸術性は、理解の体験の中に求められなければならない」(一一五) という一点であろう。しかしながらこのことは、

しからば文学は体験されなければ存在せず、また例えば源氏物語の文学は、その読者の数だけ違った形で存在するということになるのか、という屁理屈を述べたてる余地を残すものではなかろうか。[中 略] ここにもまた、余りにも伝達という実用的機能に則して文学を説こうとされすぎた嫌いがあるのではなかろうか。(1956:122-123)”

また、『続篇』で述べられた時枝学説の正当性に対しても疑問の声が上がる。その最初が、同年に門前真一によって発表された「言語過程説とラング、パロール」である。この論文は『天理大学学報』第22号に掲載され、そこで門前は、これまで同様、時枝学説におけるラング否定について、次のように疑問を投げかける。

“言語学は意識そのものに関する学ではなく、記号の学である。くわしく言えば、記号を通じて誰かが誰かに何物かについて語ることを研究する。内容のない主体の作用というようなものは目にも見えない、手にもふれることの出来ないものであるから、実証を旨とする経験科学の直接の対象とならない。ソシュールのラングがメンタルな抽象であると同様にあるいはそれ以上に時枝博士の内容のない言語主体の作用もメンタルな抽象である。言語学の具体的の対象はそれとは異なったものである。それはソシュールのパロールであり、時枝博士が特定個人の特定表現として先ずとらえられる具体的な言語行為である。[中 略] 時枝博士は言語過程の原理的分析においてはソシュールほどこの言辭的表示を重要視していないように思われる。また特に注意したいのは、ソシュールの場合一回一回のパロールを成立させる根拠としてのラングの概念があり、そして時枝博士の場合にはこのようなラングの概念が否定されていることである。しかしながら時枝博士はラングの概念を徹底的に否定されているであろうか、否定しながらラングを取扱っていないであろうか。それをわたくしは疑問に思う。[中 略] 時枝博士はかつて、その言語過程説を

言語研究の対象をひとえに具体的な個人の言語行為に求め、そこに言語のあらゆる問題の根源を見出そうとする… (佐藤喜代治氏の「言語過程説についての疑問」に答えて、国語学4、昭和二五・一〇p.70)

ものとして、ラングの学とパロールの学とを二次元的に対立させる立場に対して否定的見解を述べられた。しかしながら言語学が個別的な事例の記述に終止せず、普遍的に体系づけられた概念を志向する時、それは必然的にラングの学になるであろう。時枝博士のラング否定はソシュールのそれ

に止まるか、あるいはいかなる意味においても絶対にラングを否定されるか、それはわたくしには疑問である。(1956:6-11)”

更に門前は翌年、「言語学の体系と言語過程説」を『天理大学学報』第24号に発表し、時枝のラング否定について次のように批判する。

“時枝博士の体系的変は、すなわち示差的連合的な関係構造をもつラングの記号体系に外ならず、それは個々の言語表現の成立に関与する体系的事実そのものであるとって差支えない、そして体系的変の構造を明らかにするとき、そこにラングの学が成立し、音韻、語彙、文法の三大部門がなんらかの形で新しく組織されるであろう。(1957a:20-21)”

同じく1957年、服部四郎は「言語過程説について」(1960:149-165にも再録)と題する論文を『国語国文』第26巻第1号に発表し、時枝がソシユールの原典よりもその翻訳によって与えられた認識に立っており、そうした脆弱な認識の上でラングを否定する一方で、「型」という独自の概念を導入する時枝学説の不当性を次のように指摘する。

“時枝教授は「正篇、第一篇六」において、ソシユールの学説を批判される際に、彼の本文における表現そのもののみを(しかもその日本語訳を!)問題にされた感がある。私が教授のソシユール批判に根本的な点で賛成し得ない一つの大きな理由はここにある。[中 略]

一方我々は、[inu] 或いは [neko] という社会習慣的型にはまった音声を聞くと、「犬」或いは「猫」という動物を思い出す習慣を持っている。これも日本語的な社会習慣によるものと言わなければならない。この繰返しの活動も、我々が先天的に有した能力のみによるものではなく、我々が、“日本語の話される”社会に生まれて成人する間に、たとえば「犬」に注意を向けている時に [inu] という発音を度々聞かされたために、条件反射的になし得るようになったものに過ぎない。[中 略]

我々日本人は、日本語的社会習慣による繰返しの特徴を含む右述のような言語活動をいとなみ得るからこそ、相手の日本語的「表現行為」を「理解」することができるのである。[中 略]

時枝教授は、「表現」や「感情表現」において、「型」が「先行」して「存在」することを認めて居られるのだから、何故一步進めて、「言語表現」

においても同種の型が先行して存在することを認められないのであろうか。私のいう、言語活動における社会習慣的に繰返し現れる特徴（ソシユールのラングに当る）とは、早くいえば、言語活動におけるこの種の「型」のことであるといつてよい。（厳密にいうと、こういう特徴が組合わさってゲシュタルトをなしたものが「型」である、というべきである。）社会習慣的に学習されたこの種の型が先行しなかったならば、人間は（言語）表現行為をなす術を見出すことができないであろうし、（言語）理解行為をなすこともできないに違いないのである。（1957a:6-10）”

しかしここでの服部の論調は、ソシユールの用いたlangueという術語で表された概念の正当な解釈よりも、服部自身が言語研究においてこうした概念をどう捉えているかといった持論の展開に偏りすぎた感を払拭し得ない。それは、この時の服部自身の次の言葉にも見ることが出来る。

“さて、ソシユールのいうランゲージュ（langage）は、私のいう言語活動に当るといえよう。[中 略]

私の、言語活動の分析的考察は、言語研究の必要上、独自の見地から経験的に進めて来たもので、ソシユール学説の影響も受けたけれども、特にそれを理解し解釈するために行つて来たものではない。従つて、私の分析とソシユールの分析とが細部に亘つて完全に一致するものではない。[中 略]

さて、ソシユールが、ラングのほかにランゲージュ無しと考え、時枝教授がラングの概念を完全に否定して言語活動のみを認められるとすれば、言語活動の中に社会習慣的に繰返し現れる特徴を認める私の説は、両者の対立を解消せしめる第三の説ということができよう。[中 略]

しかしながら、ソシユールは、ラングの研究の重要さを強調するのあまり、ランゲージュこそ我々の直接観察し得る対象であつて、ラングは我々がその中から分析によつて抽出し得る特徴に過ぎないことを強調せず、ラングのみが我々の観察の対象となり得るような印象を与える説き方をしてゐる点、発話活動（表現活動）の中にもラング的特徴のあることを強調しなかった点などで、[中 略] 追従者に誤解されて、時枝教授が非難して居られるような素朴な言語観の生ずる原因ともなつたと考えられる。（1957a:7-9）”

しかし、この服部の論を擁護する形で、同年、門前は『国文学研究誌山辺道』第3号に「言語過程説と構造主義言語観」を發表する。門前はそこで、時枝の考え自体が既に、ソシユールに範を取る構造主義的な要素を

有していながらも、その視点の違いにより異なりを呈している旨を次のように指摘する。

“ソシユールの理論が構造主義といわれるのは、ラングを記号の体系として、分節された全体としてとらえている点にあるであろう。これに反して時枝博士は、ソシユールのラングをその単位要素としての個々の記号として、せいぜいその算術的総和として考えられているようである。言語の構造主義的な見方にとって一番大切な全体の概念が異なっている。恐らくは時枝博士にとっては、つぎのような構造主義の基本的概念が見失われているのではなかろうか。すなわち、一つの音韻も、一つの語も、一つのセンテンスも、孤立的に存在するものでなく、一つの特定のラングの全体の体系の中に他のものと対立して、相互連関的に存在しているということである。(1957b:40)”

同じく門前はそこで、時枝の「型」の概念についても、それが構造主義的な視点である点を、先の服部の「言語過程説について」を引き合いに出して次のように指摘する。

“わたくしは言語過程説においていたるところに型あるいは類型という概念のあらわれることを問題として取り上げて見ようと思う。

それらの中のあるものはいままで述べて来た過程的構造形式とほとんど同じ意味のものである。これは時枝博士の側に立って考えれば必ずしもラングの概念を想像しなくてすむかも知れない。しかし一般の言語学者の考えや、われわれの常識からすれば、背後にラング的体系を前提とするのが自明のことと思われるところの型の概念が、言語過程説の理論の一方に含まれている。これとても時枝博士の立場としてはあくまでラング的概念を否定されるであろうけれども言語過程説の文法論においてはすでに述べたように風呂敷型とか入子型の型が説かれている。また原論各論の第六章言語美論には語の美的表現に必要な構造形式としての直線型、曲線型、屈折型、倒錯型などがあげられている。これらの型はすでに述べた過程的構造形式のことであり、ラング的概念が当然含まれるであろう。[中 略] 注意すべきことはソシユールをはじめ一般に言語学者の言語というものに対する考えは、言語行為そのものはその背後にラングの図式を含むものとなっているのに、言語過程説では一方的に前者のみが言語そのものとして説かれ、後者が否定されていることである。(1957b:44-50)”

そして、多少批判の調子を和らげながら、言語過程説の有効性に対して、次のような希望を述べることで、自らの論を締めくくる。

“時枝博士はこれらの過程的構造形式のカテゴリーをたとい型であっても、ラング的のものでないとされる。服部博士やわれわれはそれを型であると同時にラング体系の中の要素と認める。

言語過程説の出発点は正しいし、理論的にも内部に矛盾を含んでいないとしても、その実践的作業は結果としてラング的のものを取扱っている、すなわちその否定したソシユールのラング的概想を援用して対象を処理している矛盾を生み出していると考える。そして実際時枝博士の言語理論の体系の根本思想は正しかったが、半面においてそれと対立するソシユールのラング概念をつつむような体系を目ざされなかったため、根本理論の展開に不自然な矛盾を生じた。そしてこの欠点はほんの僅かな修正、構造定義言語観の全体性の概念を個々の言語行為の背後に、それが成立のための、欠くべからざる外部条件でなく、欠くべからざる相補的の言語概念として導き入れることによって、救われるのではなかろうか。(1957b:52)”

こうした反論を一身に浴びながらも、時枝は、服部の「言語過程説について」に対する回答として、同じく1957年に「服部四郎教授の「言語過程説について」を読む」を『国語国文』第26巻第4号に発表する。そしてそこで、服部の先の批判がソシユール学説の解釈を服部の持論に適用するがあまり、部分によってはソシユール自身の解釈を歪めてしまう危険性のある点を指摘しながら、次のように牽制する。

“[前 略] 服部教授は、私が、「言語における型」ということを言ったことを取上げて、

時枝教授は、「表現」や「感情表現」において、「型」が「先行」して「存在」することを認めて居られるのだから、何故一步進めて、「言語表現」においても同種の型が先行して存在することを認められないのであろうか（論一〇上ノ三）

と述べられ、[中 略] 私がいう「型」とは、連合の習慣であり、「ソシユールのいう「ラング」（少なくともその一部）なのである」と言われる。服部教授のいわれるように、私の「型」の概念と、ソシユールの「ラング」

の概念とが、近似しているものであるか否かを論ずることは、ここでは、充分、慎重に扱われねばならない。何となれば、服部教授は、前項に述べたように、序説並びに註の解釈に従って、ソシユールのラングを「言語活動において社会習慣的に繰返し現れる特徴」(論七上)と考えられた。しかしながら、少なくとも、私においては、ソシユールの考えているラングは、右のようには考えられない。私の見るところでは、ソシユールは、ラングを、個別的な言語活動から抽象された一般的特徴とは考えていない。そのような個別と普遍との関係において認識されたものではなく、言語活動によって、生産されたものであり、言語活動によって働きかけられるものとして規定されている。ラングが言語学の具体的な対象であると言っていることから、以上のことは明瞭である。服部教授のラング観は、教授独自の解釈に基づくもので、ソシユールの真意そのものであるかどうかは、甚だ疑わしい。[中 略]

服部教授のように、「ランガージュこそ我々の直接観察し得る対象であって、ラングは我々がその中から分析によって抽出し得る特徴に過ぎない」(論九ノ上)といわれる時、それは、認識の所産であって、研究の対象として指定されたソシユールのラングとは、全く別ものであると考えなくてはならない。それは、服部教授独自のラング説であって、ソシユール理論のラングとは、全く無縁のものである。(1957:27-28)”

しかしその一方で、自身に寄せられたソシユール学説の解釈の不備に対しては、

“仮に一步を譲って、私のソシユール解釈に誤りがあったとしても、それによって言語過程説の妥当性を云々することは、当を得たことではない。過程説の当否は、過程説自体の理論構成の当否を問題にすることから始められなければならないのである。時枝のソシユール解釈には誤りがある。従って、言語過程説は誤っているという結論が度々聞かされたのである。しかし、それは学説批判の方法としては正しくない。「国語学原論」正篇は、そのソシユール批判の項を抹殺しても、充分、批判の対象となり得るように構成されていることを自負しているのである。世の識者批評家に、切にそのことを希望するのである。(1957:28-29)”

と、それを認める形で、自身の回答を締めくくっている。

それに対して、服部は同じく1957年、「ソシユールの langue と言語過程

説」(1960:166-218にも再録)と題する論文を『言語研究』第32号に発表する。そこで服部は、「言語過程説について」で、時枝がソシュールの原典よりもその翻訳によって与えられた認識に立っており、そうした認識が誤っているとする指摘を、更に具体的に実証する。そこではソシュールが *Cours* で用いた *entité* という術語とそれに対して付けられた「実存体」という訳語の是非、*langue* と *parole* という術語とそれが表す概念、及び *langue* の社会的 position 付けについて、次のように論を展開する。

“ソシュール学説に対する教授の解釈と私のそれとの相違の一つは、*une entité psychique* (小林英夫博士訳「心的実存体」、1940年改訳新版による。以下同様。) という言葉に関係がある。[中 略] ソシュールがその著 *Cours de linguistique générale* (Paris, 1931³) の序説の19頁の脚注で、*la langue n'est pas une entité* 《*langue* は実存体ではない》と言っておきながら、本文において *langue* に関連して *entité* という日本語の単語を用いるのは、比喩的意味或いは転義において用いているのだ、と解釈するからである。いずれにしても、*entité* というフランス語の単語を「実存体」と訳するのはよいが、この「実存体」という単語によって日本語的に考察しながらソシュール学説を批判することは危険だと考えるから、まず *entité* というフランス語の意味を調べよう。[中 略] 大まかに言って、フランス語の *entité* には、Martin の辞典に見えるように、「物」という意味と、「本質」という意味とある。「物」というのは、客観的な物質的な実在物のことで、机・石・木・犬・人・手・尾などは勿論のこと、流れ・風・波も含まれる。「自然有機体」も勿論この「物」である。

上に引用した *la langue n'est pas une entité* という文においてソシュールが *entité* というのは、まさにこの「物」のことであろう。なぜなら、*langue* は自然有機体ではないと言おうとしたものと考えられるから。小林博士がこれを「実存体」訳されたのは不適當ではない。[中 略] そこで、ここでは *une entité psychique* の意味について一般論をすれば十分であろう。この単語連結を、小林博士は「心的実存体」と訳し、時枝教授もこれを採用しておられるが、この場合の「実存体」は、上に問題とした「物」(及び Robert の辞典の(二)の意味)ではあり得ない。たとえば「観念」——これも「心的実存体」の一例といってよからうが——などと称しても、我々はそれを「客観的な物質的対象」や自然有機体を観察するように観察することはできない。心的な活動として表象されるときに、内部観察 (*introspect*) し得るにすぎない。だからして、*une entité psychique* というのは比喩に過

ぎないと私は思う。[中 略] いずれにしても、客観的な対象から受ける直接経験を、外界とは関係なく、我々の内部のみにおいて主観的に経験できると考える人はあるまいから、自然有機体をentitéと呼ぶ場合と、entité psychiqueのentitéとは、同一の意味ではない、と言っても異存はないのではなかろうか。(1957b:1-3)”

“まず、langueがlanguageの一部分に過ぎないことは、次の説明によって明らかである。[なお、原典ではここにCoursの25頁の文が引用されるが、本稿では先の論文(松中、2005)の2.で既出のため、省略する。] この説明によれば、langageには、概略、少なくとも次のものが含まれることがわかる。

- (A) 発話の際の話し手の心理的活動、即ち発話活動の心理的な部分。
- (B) 発話活動の生理的な部分——これには外部から観察できる発音運動も含まれる。
- (C) 発話の音声——これは物理現象である。
- (D) 聞き手の諒解活動——生理的な部分も心理的な部分もある。

上のソシユールの文章を訳するに当り、私は、小林博士がlangueを「言語」、langageを「言語活動」と訳しておられるのを、わざと日本語訳をつけずに、langue、langageとした。なぜなら、日本語の「言語」という単語はlangageの意味にもlangueの意味にも用いられるから、langue=「言語」と固定すると、誤解を生ずるおそれがあると思うからである。[中 略] だから、我々は、翻訳(langue=「言語」というような)によって考えることなく、原著の意味を直接把握するように努力しなければならない。[中 略] 時枝教授の「言語過程説」の「言語」はlangageに近い意味であるのに、小林博士の訳本の「言語」はlangueの意味である、と概略的に言い得る事態であるために、誤解が生じたように思う。

時枝教授は、

ソシユールの概念には、私のいうような、行為、活動の概念は、全然含まれていないとするのが、私の解釈である(「回答」26頁下)

と言われる。しかし、教授は、御自身の「言語」の概念と比較されるためには、langueの概念ではなく、langageの概念を検討さるべきだったと思う。従って、

服部教授は、ソシユールが「言語は人間を離れては存在しない」と言ったことを、直に言語が活動として成立するものであると言ったように解するのであるが、それは、本文中の表現から言っても、原著の体系から言っても、無理であると見るのが、私の結論である。(「回答」26～7頁)

という時枝教授の御意見には、賛成することができないのである。

[中 略] langueとparoleとlangageとを並列させたり、langueとは「日本語」「英語」などのような特定の言語で、langageは抽象的に考えた言語一般であるとしたり、或いはlangageは個別的具体的な言語行動、paroleは一般的抽象的な言語行動としたり、或いはまたlangueはlangageに対立する現象であるかの如く説いたりするのは、正当ではないと私は考える。

従って時枝教授が

ソシュールが、右のように考えていた証拠は、ラングに働きかける、話手の活動である言語活動^{ランガー・ジュ}を、ラングとは別に考えていることから推測出来ることであるとし、…（「回答」26頁下。圈点服部）

と言ってlangueとlangageとを対立する現象のように考えておられるらしく見えるのにも、賛成することができない。[中 略] 数年前に、アメリカの勝れた言語理論家Rulon S. Wellsがソシュールの学説を解釈批判するに当り、私の見解に非常に近い解釈を行っているのを見出した。[中 略] ウェルズがlangueとparoleを強いて英訳せず、そのまま術語として用いているのは賢明な策である。日本語訳の場合にも、langueとparoleに対し、強いて訳さずに「ラング」「パロール」としておけば、多くの誤解を防ぎ得たであろうにと惜しまれる。(1957b:7-10)”

“また、時枝教授が次のように言っておられることについても、私見を述べておこう。

我々の具体的な対象は、精神物理的過程現象であるにも拘わらず、それをそれと把握せずして、混質的であることを理由として、他に等質的な単位要素を求めようとすることは、明かに対象よりの逃避であり、方法を以て対象を限定したことになるといわなければならないのである。（「正篇」62頁）

ソシュールは、langageは物理・生理・心理の領域にまたがり個人的領域にも社会的領域にも属して異質的だから研究が困難だが、langueは等質的でその記号の二つの部分である聴覚映像も概念も共に心理的であるから、それを研究対象とすることによりすべての困難が解決するという意味のことを言っている。（Cours 25頁）[中 略] ソシュールの言葉は、よく味わって見ると、結局、社会習慣的特徴（の総体）を研究対象（観察対象に非ず！）とするとき研究作業が楽になる、（個人的特徴はラングを明かにしてから研究する）という意味に解し得るけれども、非常に誤解され易い表現といえよう。それにも拘らず、時枝教授のように解することは誤解であると言ってよいのではないかと思う。[中 略] 時枝教授は、ソシュールのlangueの概念を誤解して——と私は信ずる——これを否定されたけれど

も、結局、時枝学説はlangueの概念と無縁なのでは決してない、と言うことができるというのが、私の意見である。(1957b:24-25)”

また、翌1958年には、門前が『国文学研究誌 山辺道』第4号に「言語段階観——解釈文法の効用と限界——」を發表する。そこで門前は、解釈文法の適用を図りながらも、時枝学説の所在を構造的言語観に求め、次のように断定する。

“国語学原論は、一応ある段階においてではあるが時枝博士の言語理論の発展完成を示すものである。その各論すなわち、音韻論、文法論などは当然言語事実の体系化であり、ソシユールの立場からいえば、これはラングの学であろう。[中 略] 時枝博士の文法では統語、文論、文章論が分かたれる。ソシユール流に考えれば時枝博士の語論、文論も従来のそれと同じようにラングの文法であろう。[中 略] 一応ラング、パロールの文法を区別したが、時枝博士の文法は全体としてはパロール的な言語過程説を背景にしたものである。[中 略] 時枝博士の言語過程説の立場が普遍的な概念的な言語の抽象形式に対してあまりにノミナリスト的な見解に立っているため、言語の段階観の多元的秩序を見失って一元論的なものに落ちこんでいるようにわたくしには思われるのである。(1958:3-16)”

そして服部の1957年の論を最後に、時枝による回答や反論は見られなくなり、一般的には、“時枝・服部論争”の言語学的な視座での論戦は、これをもって一応の終息を見たとされる。しかしこの終息期間は長くは続かず、1960年代に入ると哲学的な視点から、再び“時枝・服部論争”に光が当たり出すが、そこでの議論についての考察は次の機会に譲る。

(追記) 本論文は、敬愛大学2006年度研究プロジェクト補助金(「時枝・服部論争とその言語学的意義について」)の助成による研究成果である。

なお、引用文中の旧字体は、全て新字体に改めた。また、Saussureの日本語表記も時代によって、“ソッスユール”、“ソッシュー

ル”、“ソスジュール”、“ソシジュール”と異なるが、本稿では全て“ソシジュール”で統一した。更に、引用文中で“右は”となっているのは、原典では原文が縦書きであるためである。

また、現在では使用禁止とされている卑語や侮蔑語は、当時の原資料を重んじる意味でも、あえてそのまま用いた点、ここに改めて記しておく。

注

- 1) 時枝は『国語学原論』の中で、その批判姿勢を次のように述べている。

“私はかつて世の言語学者に次の様なことを希望したことがあった。言語学者がもし国語学の指導ということを目標にするならば、泰西に於ける新しい言語学の理論や結論をこの国に紹介すると同時に、併せて言語学に於ける対象と理論との相互関係、それらの方法の起こって来た因由、学派の生じた根本的理由、その背後に存する一般的な思潮等について、国語学者が充分批判的態度をとり得る様な資料をも教えられたいということであった。もしそれなくして、一の学説をとって、これが国語学の指導原理であるかの様に強いるならば、それは国語学にとって、これより甚だしい困惑は無いであろうと思うのである。(1941:59)”

そして時枝は、引き続き『国語学原論 続篇』において、橋本進吉の『国語学研究法』を引き合いに出し、その研究姿勢がソシジュールの学説を踏襲したものである点を指摘しながら、当時の言語学界の研究姿勢と照らし合わせて次のように述べる。

“ソシジュール言語学を例にとるならば、伝達は、資材的言語ラングの運用である。言語学の対象は、ラングの運用の事実即ち言語活動ラングージュではなくして、伝達以前の資材的言語ラングであり、ラングの性質法則を研究するのが言語学の任務であるとしたのである。このような言語学において、伝達ということは勿論、表現ということすら、問題にされないのは当然である。[中 略] ソシジュール言語学の立場において、もし、伝達の事実を説明するとしたならば、どのようになるかというに、およそ、次のようなことが、推測されるのである。甲乙の間に、伝達が成立するのは、甲乙が、同じ資材的言語ラングを所有するからである。換言すれば、ラングは、思想伝達の道具として、各人の脳裏に貯蔵されているのであるソシジュールは、この事情を、各人が同じ辞書を一部づつ

所有しているに似通っていると説明している（『言語学原論』改訳本三一頁）。

以上のような説を承けて、橋本進吉博士は、伝達の事実を、次のように説明された。

言語は一定の音声に一定の意味が結合したもので、思想（及び感情）を他人に伝える為に用いられるものである。今我々が言語を実際に用いる場合について考えて見るに、話手が、ある事を言語によって伝えようとする時には、その事物を表わす一定の音声を口に発する。相手は、その音声を聞いて、その音声の表わす事物を心の中に浮べて、話手が何を伝えようと欲するかを知るのである。即ち、話手と聞手とでは、互に違った二つのはたらきが行われるのである（『国語研究法』橋本進吉博士著作集第一巻一七四頁）。※ かように話手の発表作用と、聞手の理解作用とによって、思想の伝達が出来、言語がその用を全うするのであるが、しかし、話手の伝えようとする所のものを、聞手が、正しく誤らず理解し得る為には、話手も聞手も同様に、同じ音に対して同じ意味を結合させなければならないのである。（同上書、一七五頁）。それでは、どうして話手も聞手も同じ音に同じ意味を結合させることができるかというに、話手も聞手も、周囲の人々から、これまで幾度もその音を聞き、且つそれにはいつも一定の意味が伴っている事を経験して、その音の記憶と、その意味、即ちその音のさし示している事物の記憶とが相伴って心の中に残っているからである（同上書、一七五頁）。

かように、話手及び聞手の心の中に一様に存する言語表象（一定の音声表象に一定の事物表象が結合したもの）は、言語の中心又は本体をなすものであって、これによって発表と理解の作用が行われ、言語が思想伝達の目的を達するのである。そうして、思想を通ずる為に行う発表理解の作用は、その時その時に完成せられ、その場かぎりのものであるに反して、言語表象は、その言語を用いる人の心の中に永く存して、何時なりとも必要に応じて同じ言語を使用する事を可能ならしめるものである。（中略）言語表象は同じ人では何時も同じであるばかりでなく、同じ言語を用いる社会のあらゆる個人に於て同じである（同上書、一七六―一七頁）。言語表象は、つまり人々が記憶している語句である。「いぬ」という語の意味はと考えた時、心中に思い浮ぶのが「いぬ」という言語表象中の事物であり、「いぬ」という語の発音はと考えた時、心中に思い浮かぶのがその音声表象である。（中略）かようにして、「いぬ」という語によって、話手が聞手に伝えようと欲するその犬の事を聞手に知らしめる事が出来れば、それで目的は達したのであって、この場合に、「いぬ」という語は、ある犬の事を他人に伝える為の道具として用いられたのである。（同上書、一七八―一九頁）

右は、正に、ソシユール理論に基づく伝達論である。引用文中に言われている言語表象とは、ソシユール学説に言うところのラングに相当すものであり、それは、同一社会の成員においては同じであるとする。それが、表現理解の道具として用いられて、伝達が成立するのである。右の解説によっても知られる

ように、言語の中心、または本体をなすものは、言語表象、或いはラングであって、その運用は、言語学の問うところではなく、従って、伝達の事実が、言語学の正面の課題になり得なかったことを知るのである。(1956:23-25)”

なお、※印は、書名が正しくは『国語学研究法』であるにもかかわらず、時枝の引用文中では誤って『国語研究法』となっており、本稿でも原文通り誤りのまま引用したことを示している。

- 2) 三浦の学説は、時枝文法の主張点と強く類似し、場合によっては時枝文法を踏襲、修正する部分があるのも事実である。例えば時枝が『国語学原論』で“詞”、“辞”として分類したものを、三浦は『日本語はどういう言語か』で“客体的表現”と“主体的表現”という術語で分類している。また、言語の捉え方に対しても、三浦はモンタージュ論を基盤にして、時枝が「詞と辞の連続・非連続の問題」(1954)で見せるゲシュタルト原理と同様の姿勢を強く全面に押し出している。
- 3) 1952年には、時枝と大久保の論争は、更に形を変えて発展する。1951年に、大久保はS.I.ハヤカワ著の“*Language in Thought and Action*”の邦訳を出版する(邦訳題名『思考と行動における言語』岩波書店)が、この原著で示された言語の研究法に対して、翌年、時枝が次のように苦言を呈する。

“言語は、本書において、社会生活の重要な手段として、捉えられ、しかも、そのような言語の社会的機能が、正面の対象として問題にされていることは、従来の言語学書に類を見ないところである。今までの言語学が、到達しようとするところを、本書は、出発点としているとも言えるのである。しかしながら、本書は、右のように、社会生活の場において捉えられた言語をそのまま科学の対象として考察しようとするのではなく、言語の歪められた機能と、それのもたらす危険とを除くために、言語に対する正しい認識と技術とを勧めようとするのである。そのために、著者は、言語のコミュニケーションの種々相を採集することに、至れり尽せりで、読者は、現実の言語生活の多彩なパノラマの中に身を置く思いをするのであるが、一度、著者が現象の説明に使用した言語理論に考えを及ぼす時、それは、正統的言語学によって伝承された言語理論以上の何ものでもないことを知らなければならないのである。[中 略] 伝統的な言語理論に従えば、記号の体系は、それを使う個々人を超越した存在である。記号と物との関係は、人間の同意によって決定され、必然的な関連が無い(三二、三四頁)。ここで、我々は、ソシュールの「ラング」の理論を思い浮べればよいのである。このように、同意によって一定の価値を与えられた記号とその体言とは、言語的世界を構成しつつ、その記号によって表わされている外在的世界と対立して存在する。[中 略] 本書の著者は、現代の思想交換に現れた幾多の障害を指摘して、正しい思想伝達の方法を確立しようと意図した。もし、著者が、思想交換の実態を、仔細に観察し、分析する労を惜しまなかったならば、

言語の本質と機能について、より正確な認識を獲得し、そこから、更には的確に病根をつきとめ、それに対する適切な処置を工夫することが出来た筈である。ところが、著者は、あれほどまでに、豊富な事実を収集しながら、そこから新しい原理を帰納する代りに、在来の言語理論によって、これを説明することで満足してしまった。その結果が、言語と物との必然的関係を否定することによって、言語の最も重要な機能をも否定することになり、新に言語と物との関係を設定することによって、再び言語の魔術的用法を強調することになってしまったのである。(1952:49-55)”

時枝のこの苦言を受けて、同書の翻訳者としての責任と立場から、同年には大久保が時枝の疑問に対して次のように反論している。

“時枝氏は、ハヤカワの理論の根底に「伝統的言語理論が持出される」(五一頁)と言い、「記号」の論がそれであるとしてソシユールを引き合いに出します。

「伝統的」という形容詞は高いレベルの抽象で、一体どこからどこまでの言語理論を包むのか明らかではありませんが、同時にこの語は「旧い」という感化的同包と、時枝氏から見れば、「誤っている」という含みを持ちます。[中 略]ハヤカワの立っている「一般意味論」は言語学者のほか、心理学者・神経学者・社会学者その他の諸科学領域の研究家が協力して建設しつつある言語観で(それには穴のあいている所もあるようですが)単にソシユールとの一点の類似だけを見て「伝統的」と想像されたのは早計であると思われました。[中 略]ソシユールとの類似を時枝氏が見たのは、「記号と記号で示されているものとの間には何の必然的な関連 necessary connection もない」(34頁—以下ローマ数字は訳書の頁)といっている所です。ここはたしかにソシユールの例の記号の「恣意性」に似ているところですが、原文の文脈で解すれば、時枝氏が解釈されたように、「言語と物との間には、何の関連も無い」(五三頁)とは言っておりません。こうした意味のとり方は不当な拡張です。(1952b:59)”

二人のこうした論戦は、特に大久保を中心として、1960年以降の第二次論争期にも引き継がれていく。

引用・参考文献

- Hayakawa, S.I.. 1939. *Language in Thought and Action*. Harcourt, Brace and World, Inc. New York. (大久保忠利訳. 1951.『思考と行動における言語』岩波書店.)
橋本進吉. 1946^a.「国語学概論」『橋本進吉博士著作集 第一冊 国語学概論』pp.1-167. 岩波書店.

- 橋本進吉. 1946^b. 「国語学研究法」『橋本進吉博士著作集 第一冊 国語学概論』 pp.169-297. 岩波書店.
- 橋本進吉. 1948. 「国語法要説」『橋本進吉博士著作集 第二冊 国語法研究』 pp.1-96. 岩波書店.
- 橋本進吉. 1953. 「文節による文の構造について (講演要旨)」国語学会編『国語学』第13・14号、pp.12-19. 武蔵野書院.
- 服部四郎. 1951. 「メンタリズムかメカニズムか？」日本言語学会編『言語研究』第19・20号、pp.1-22. 三省堂.
- 服部四郎. 1957^a. 「言語過程説について」京都大学国文学会編『国語国文』第26巻、第1号、pp.1-18. 中央図書出版.
- 服部四郎. 1957^b. 「ソシユールのlangueと言語過程説」日本言語学会編『言語研究』第32号、pp.1-42. 三省堂.
- 服部四郎. 1960. 『言語学の方法』岩波書店.
- 風間喜代三. 1978. 『言語学の誕生』岩波新書.
- 風間力三. 1951. 「言語研究の対象——言語過程説についての一つの疑問——」京都大学国文学会編『国語国文』第20巻、第6号、pp.41-63. 京都大学.
- 門前真一. 1956. 「言語過程説とラング、パロール」『天理大学学報』第22号、pp.1-16. 天理大学人文学会.
- 門前真一. 1957^a. 「言語学の体系と言語過程説」『天理大学学報』第24号、pp.1-21. 天理大学人文学会.
- 門前真一. 1957^b. 「言語過程説と構造主義言語観」『山辺道』第3号、pp.38-52. 天理大学国文学研究室.
- 門前真一. 1958. 「言語段階観——解釈文法の効用と限界——」『山辺道』第4号、pp.1-16. 天理大学国文学研究室.
- 木股知史. 2005. 「心・言葉・イメージ」『月刊 言語』2005年7月号、pp.56-63. 大修館書店.
- 黒岩駒男. 1952. 「言語の過程性と記号契約性 言語性成立の場」『久留米大学論集』第4巻、第1号、pp.17-21. 久留米大学.
- 小林英夫. 1932. 「ランゲージュの概念の疑義解釈」東京大学国文学研究室編『国語と国文学』第9巻、第7号、pp.1-23. 至文堂. (小林英夫. 1935. 『言語学方法論考』三省堂. ならびに小林英夫. 1976. 『小林英夫著作集 1 言語学論集 1』みすず書房. にも再録)
- 小林英夫. 1935. 『言語学方法論考』三省堂.
- 小林英夫. 1937. 『言語学通論』三省堂.
- 小林英夫. 1948. 『言語学の基礎概念』振鈴社.
- 小林英夫. 1976. 「国語学と言語学」『小林英夫著作集 1 言語学論集 1』 pp.309-365. みすず書房.
- 小林英夫. 1976. 「文法論総説」『小林英夫著作集 1 言語学論集 1』 pp.367-484.

- みすず書房.
- 小林英夫. 1977. 「翻訳の問題」『小林英夫著作集 3 言語学論集 3』 pp.409-449. みすず書房.
- 小林英夫. 1978. 「日本におけるソシユールの影響」『月刊 言語』 1978年 3月号、pp.44-49. 大修館書店.
- 国広哲弥. 2006. 「ソシユール構造主義は成立しない」『日本エドワード・サピア協会 研究年報』 第20号、pp.17-22. 日本エドワード・サピア協会.
- 町田 健. 2004. 『ソシユールのすべて 言語学でいちばん大切なこと』 研究社.
- 前田英樹. 1989. 『沈黙するソシユール』 山本製本所.
- Martinet, André. 1960. *Eléments de linguistique générale*. A. Colin, Paris. (三宅徳嘉訳. 1972. 『一般言語学要理』 岩波書店.)
- 丸山圭三郎. 1981. 『ソシユールの思想』 岩波書店.
- 丸山圭三郎・竹内芳郎. 1982. 「言語・記号・社会——『文化の理論のために』と『ソシユールの思想』をめぐって——」『思想』 3月号、pp.1-35. 岩波書店.
- 丸山圭三郎. 1982. 「一般言語学講義」『国文学』 6月号、pp.16-17. 学灯社.
- 丸山圭三郎. 1983. 『ソシユールを読む』 岩波書店.
- 丸山圭三郎編. 1985. 『ソシユール小辞典』 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1988. 『言葉・文化・無意識』 河合文化教育研究所.
- 丸山圭三郎. 1994. 『言葉とは何か』 夏目書房.
- 松中完二. 2001. 「認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記」『アジア文化研究』 第27号、pp.197-211. 国際基督教大学アジア文化研究所.
- 松中完二. 2005. 「時枝・服部論争の再考察 (I) —言語研究の原点的問題として—」『敬愛大学 研究論集』 第69号、pp.109-146. 敬愛大学経済学会.
- 松澤和宏. 2004. 「ソシユールの現代性—伝統的な時間をめぐって」『月刊 言語』 2004年12月号、pp.50-53. 大修館書店.
- Mauro, Tullio. 1970. *De. Ferdinand de Saussure Corso di Linguista Generale Introduzione, traduzione e commento*. Nella Universale. (山内貴美夫訳. 1976. 『ソシユール—一般言語学講義校注』 而立書房.)
- 三浦つとむ. 1948. 「弁証法は言語の謎をとく」『思想の科学』 第3巻、第5号、pp.18-29. 先駆社.
- 三浦つとむ. 1950. 『弁証法・いかに学ぶべきか』 双流社.
- 三浦つとむ. 1951. 「なぜ表現論が確立しないか」『文学』 第19巻、第2号、pp.65-77. 岩波書店.
- 三浦つとむ. 1968. 「時枝誠記の言語過程説」『文学』 第36巻、第2号、pp.37-52. 岩波書店.
- 三浦つとむ. 1976. 『日本語はどういう言語か』 講談社学術文庫.
- 三浦つとむ編. 1981. 『現代言語学批判 言語過程説の展開』 勁草書房.

- 三浦つとむ. 1983^a. 「時枝理論との出会い」『三浦つとむ選集 1』 pp.24-25. 勁草書房.
- 三浦つとむ. 1983^b. 「時枝理論への民科の言語学者の攻撃」『三浦つとむ選集 1』 pp.29-35. 勁草書房.
- 三浦つとむ. 1983^c. 「時枝言語学の功績」『三浦つとむ選集 1 スターリン批判の時代』 pp.36-40. 勁草書房.
- 三浦つとむ. 1983^d. 「言語における矛盾の構造」『三浦つとむ選集 1 スターリン批判の時代』 pp.93-113. 勁草書房.
- 三浦つとむ. 1983^e. 『三浦つとむ選集 3 言語過程説の展開』 勁草書房.
- 三浦つとむ. 1991. 「時枝誠記」『三浦つとむ選集 補巻 唯物弁証法の成立と歪曲』 pp.299-302. 勁草書房.
- Mounin, George. 1968. *Saussure ou le structuraliste sans le savoir*. Seghers. (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎共訳. 1970. 『ソシュール』 大修館書店.)
- Mounin, George. 1970. *Introduction à la sémiologie*. Bernard-Palissy, Paris. (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎共訳. 1973. 『記号学入門』 大修館書店.)
- 根来 司. 1985. 『時枝誠記研究 言語過程説』 明治書院.
- 大久保忠利. 1951. 「時枝誠記氏のソシュール批判を再検討する——時枝氏「言語過程観」批判の序説として——」『文学』第19巻、第6号、pp.78-87. 岩波書店. (本論文は、大久保忠利. 1959. 『大久保忠利・コトバの著作集 第5巻 コトバの生理と文法理論』 pp.45-60. 春秋社. と児童言語研究会編. 1966. 『国語教育研究』第9号、pp.129-138. 明治図書出版. にも一部加筆して再録)
- 大久保忠利. 1952^a. 「言語の本質を求めて ソシュール学説の発展の上に」『国語の力』第4巻、pp.2-4. 国語の力社.
- 大久保忠利. 1952^b. 「時枝誠記氏の書評への訳者よりの答え——ハヤカワ「思考と行動における言語」について——」東京大学国文学研究室編『国語と国文学』第29巻、第12号、pp.58-61. 至文堂.
- 大久保忠利. 1954. 「思考・通達・言語—国語愛——スターリン言語観を解きほぐしながら——」宮城音弥編. 1954. 『言葉の心理』 pp.148-185. 河出書房.
- 大久保忠利. 1958^a. 「スターリン言語観から学ぶこと」『大久保忠利・コトバの著作集 第2巻 コトバの魔術と思考』 pp.3-10. 春秋社.
- 大久保忠利. 1958^b. 「言語は思考にどのように参加しているか」『大久保忠利・コトバの著作集 第2巻 コトバの魔術と思考』 pp.16-33. 春秋社.
- 大久保忠利. 1959^a. 「ソシュールのラングとパロールについて」『大久保忠利・コトバの著作集 第1巻 コトバの心理と技術 増補』 pp.141-149. 春秋社.
- 大久保忠利. 1959^b. 「「概念」と「抽象」について」『大久保忠利・コトバの著作集 第5巻 コトバの生理と文法理論』 pp.164-176. 春秋社.
- 大久保忠利. 1959^c. 「「文」と「陳述」——山田孝雄さんの「統覚説」を批判しながら——」『大久保忠利・コトバの著作集 第5巻 コトバの生理と文法理

- 論』 pp.177-190. 春秋社.
- 大久保忠利. 1959^d. 「言語過程的文法論を批判する」『大久保忠利・コトバの著作集 第5巻 コトバの生理と文法理論』 pp.191-120. 春秋社.
- 大野 晋. 1977. 「時枝誠記 国語学原論」『月刊 言語』 1977年5月号、pp.40-41. 大修館書店.
- 阪倉篤義. 1956. 「書評 時枝誠記博士著「国語学原論 続篇」」国語学会編『国語学』 第25号、pp.120-123. 武蔵野書院.
- 阪倉篤義. 1974. 『改稿 日本文法の話』 教育出版株式会社.
- 佐藤喜代治. 1948. 「言語過程説についての疑問」国語学会編『国語学』 第2号、pp.17-30. 養徳社.
- 佐藤喜代治. 1952. 『国語学概論』 角川書店.
- 神保 格. 1939. 「ソシユールの言語理論について」日本言語学会編『言語研究』 第1号、pp.18-38. 三省堂.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1928. 『言語学原論』 岡書院.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1940. 『改訳新版 言語学原論』 岩波書店.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1972. 『一般言語学講義』 岩波書店.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (山内貴美夫訳. 1971. 『ソシユール言語学序説』 勁草書房.)
- Saussure, F. de. 1980. *Manuscrit du Livre*, from Ms. fr. 3951 (BPU), N9 Linguistique générale (1893-4), N11 Status et motus (1894-5), N12 Status et motus. (前田英樹訳. 1980. 「「書物」の草稿 テキストと註解」『現代思想 特集：ソシユール』 第8巻、第12号、pp.64-83. 青土社.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale (1908-1909) Introduction*. Paris. (前田英樹訳. 1991. 『ソシユール講義録注解』 法政大学出版局.)
- Shigeki, Nishiyama. 1978. Saussure's Linguistic Theories and the Study of Japanese Intellectual History. In ed. by Tetsuo, Najita & Irwin, Scheiner. *Japanese Thought in the Tokugawa Period 1600-1868 Methods and Meta-phors* (徳川思想史研究). pp.105-133. The University of Chicago Press.
- 田中克彦. 1993. 『言語学とは何か』 岩波新書.
- 時枝誠記. 1941. 『国語学原論』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1950^a. 「佐藤喜代治氏の「言語過程説についての疑問」に答えて」国語学会編『国語学』 第4号、pp.70-74. 刀江書院.
- 時枝誠記. 1950^b. 『日本文法 口語篇』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1951. 「言語の社会性について——大久保忠利氏の「言語過程観批判の序説」に対する答をも含めて——」『文学』 第19巻、第9号、pp.75-84.

岩波書店.

時枝誠記. 1952. 「書評 ^{S・I・ハヤカワ氏著}
^{大久保忠利氏訳} 「思考と行動における言語」」 東京大学国文学研究室編『国語と国文学』第29巻、第8号、pp.49-55. 至文堂.

時枝誠記. 1953^a. 「文法研究における一課題——文の統一性について——」 国語学会編『国語学』第11号、pp.1-12. 武蔵野書院.

時枝誠記. 1953^b. 「文章研究の要請と課題」 国語学会編『国語学』第15号、pp.1-12. 武蔵野書院.

時枝誠記. 1954. 「詞と辞の連続・非連続の問題」 国語学会編『国語学』第19号、pp.1-16. 武蔵野書院.

時枝誠記. 1956. 『国語学原論 続篇』 岩波書店.

時枝誠記. 1957. 「服部四郎教授の「言語過程説について」を読む」 京都大学国文学会編『国語国文』第26巻、第4号、pp.24-29. 中央図書出版.

時枝誠記. 1959. 『古典解釈のための日本文法 増訂版』 至文堂.

時枝誠記. 1973. 『言語本質論』 岩波書店.

時枝誠記. 1976. 『国語学への道』 明治書院.

戸村幸一. 1978. 「ラング・パロールとはなにか」『月刊 言語』1978年4月号、pp.54-57. 大修館書店.

山内貴美夫. 1973. 『言語学原理』 而立書房.